

山道具、今昔（第5回） 尻皮、ワカンなど

今回は小物達に登場して頂くこととしよう。

まずは、今では動物保護法や自然保護法で逮捕されるかも知れない「尻皮」について。

今でも登山用具店に行けば売っているかもしれないが、昔は毛皮屋で毛皮を買ってきて自分で作ったものだった。タヌキやムジナが最上であったが、これは些か高価であった。安価に作る場合はヌートリア（外来カワウソ）を使った。いずれも一匹丸々使ったが、予算が許せば2匹合わせにした方が暖かだった。鞣しが悪い皮は安価ではあったが、毛が抜け落ちて禿げ禿げになった。毛皮なので、雪や氷の上にそのまま座っても冷たさを全く感じなかった。当時はズボンなどが今のような高性能の素材ではなかったし、オーバーズボンも売ってはいたが極めて高価であったので、尻皮は重宝した。今頃尻皮をブラ下げていると鬻蹙を買うか、自然保護のお説教をこんこんと喰らうか、どちらにしてもかような遺物をブラ下げている人はもういない。



次にワカン（和カンジキ）について。

最近ではスノーシューが大流行りであるが、急峻な雪面を登下降する時にはワカンを使わざるを得ない。元々は山の猟師などが使っていた物が登山用具として売られ出された。右の写真は元祖・立山芦峯寺製の50年の年季物である。クロモジの木を曲げて作ってある。紐などは元々は麻紐であったが、麻紐は雪で凍ったり雪団子になったりするので、シュリンゲに変えた。また、爪が摩耗したり折れたりした



ので材木を買ってきて加工して、何回か自分で入れ替えたりもした。このワカンは今でも使っているので、亜麻仁油が沁み込んでいて黒光りがしている。最近のワカンはアルミ製であって、どうも落ち着かないが、木製の道具にはやはり温もりがある。余談であるが、軟雪と硬雪が交互に出てくるような斜面では、アイゼンを穿いた上にワカンを付けた。ワカンの爪を上側にしてワカンを付けたが、やはりアイゼンの利きが良くなかったので、この方式は流行らなかった。

最後にヘッドランプ。

今ではLED方式になって、電池も単4の小型になった。右は電池がセパレートタイプになっていて腰のベルトに刺す方式の40年前のものである。電池は単1×4本で重かったが、結構明るかった。



次回は「登山の技術書」について。

[「山道具今昔」目次へ戻る](#)